

# 「初期無量寿経」成立史における 『無量清浄平等覚経』

肖 越

## 【抄録】

本論は、次の四つの側面から「初期無量寿経」成立史における『無量清浄平等覚経』の役割を中心に検討した。まず、「初期無量寿経」成立史における『無量清浄平等覚経』の位置を検討した。次に、〈無量寿経〉最古訳の『大阿弥陀経』の原型を研究するにあたって、『無量清浄平等覚経』の意義を示した。次に、〈無量寿経〉諸訳の国土観の変遷を踏まえながら、『無量清浄平等覚経』の仏名としての「無量清浄」は、「浄土」の用語の元であり、『無量清浄平等覚経』が初期中国浄土教の成立において、重要な位置を占めることを示した。最後には、『無量清浄平等覚経』が『無量寿経』の翻訳に影響を与えたことを指摘し、更に中国初期浄土教の成立における『無量清浄平等覚経』の役割を纏めた。

キーワード：『無量清浄平等覚経』、無量清浄、安楽、浄土、『大阿弥陀経』

## はじめに

本論では、「初期無量寿経」成立史における『無量清浄平等覚経』（以下『平等覚経』）の役割を中心に検討する。初期中国浄土教成立の研究にあたって、「初期無量寿経」は非常に重要な位置を占めている。しかし、すでに指摘されたように、日本浄土教においては「後期無量寿経」の『無量寿経』<sup>1)</sup>を所依とするところから、インドにおける阿弥陀仏浄土思想の研究においても、『仏説阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経』（以下、『大阿弥陀経』）は、きわめて軽視されていると言っても決して過言ではない<sup>2)</sup>。確かに最近、辛嶋静志氏の『大阿弥陀経』の日本語現代語訳研究によって、もともと難解なる『大阿弥陀経』の全貌が以前より分かるようになってきたが<sup>3)</sup>、必ずしも「初期無量寿

1) 『大正蔵』十二卷、三〇〇～三一六頁、以下同。

2) 荻谷正雄（二〇〇三）、一頁参照。実は、日本浄土教のみならず、中国でも同じな状況で、特に中国語圏の諸国では、インド仏教の研究はかなり遅れているので、「初期無量寿経」の研究もきわめて軽視していることは事実である。

3) 最近佐々木大悟氏は、『大阿弥陀経』の研究（二〇〇九）と題して課程の学位論文（博士）を発表した。氏は、主に真宗学の立場から『大阿弥陀経』のみを検討した。

経」の成立の全貌が明らかになったわけではない。また、『大阿弥陀経』と同じく二十四願を記す『平等覚経』は、『大阿弥陀経』の後に形成されたものと見なされていることと、両経がほぼ一字一句に対応していることから、『大阿弥陀経』より更に重視されていない<sup>4)</sup>。本論では、「初期無量寿経」の成立研究の一部として、『平等覚経』の位置づけについて、次の幾つかの側面から検討してみたい。

まず、〈無量寿経〉漢訳諸本の中、主に論理的に最古訳である『大阿弥陀経』と比較することによって「初期無量寿経」成立史における『平等覚経』の位置について検討したい。

次に、「初期無量寿経」の二經典である『大阿弥陀経』と『平等覚経』とも、同じ二十四願を説くが、二経の願文の内容と配列順はかなり違うことがすでに明らかになっている<sup>5)</sup>。では、なぜそのような違いがあるのだろうか。そして、その違いを考えることにより、『大阿弥陀経』の更なる原型の基礎的考究を試みたい。「初期無量寿経」の原始形態の研究に『平等覚経』の意義を示すのが、第二節の目的である。

次に、なぜ阿弥陀仏の極楽を「浄土」と呼ぶのか、またなぜ阿弥陀仏信仰を「浄土教」というのかという問題を検討してみたい。最近、「浄土」の用語についての研究は盛んになってきた。ここで、最近の研究発表をふまえながら、『平等覚経』の仏名としての「無量清浄」と「浄土」の用語との関係について検討することによって、思想の面から初期中国浄土教成立史における『平等覚経』の意義を考察する。

最後には、『平等覚経』が『無量寿経』の翻訳に影響を与えたことを指摘したい。また、直接・間接に、曇鸞と道綽らに影響を与えたことも触れながら、初期中国浄土教成立史における『平等覚経』の意義を明らかにしたい。

## 一、「初期無量寿経」成立史における『平等覚経』

では、無量寿経最古訳の『大阿弥陀経』に比べて、『平等覚経』はどのような經典であるか、また「初期無量寿経」成立史においては、どのような位置を占めているか。ここで、『平等覚経』の特徴と「初期無量寿経」に占める位置を中心にして検討してみたい。

4) 最近、弘中満雄氏の「〈無量寿経〉展開史における『平等覚経』の意義—往生の因を中心に—」は浄土真宗の立場からの発表である。

5) 「初期無量寿経」の願文についての比較研究は、藤田宏達 (一九七〇)、三八〇～三九一頁、また同氏 (二〇〇七)、三〇四～三一頁参照。静谷正雄 (一九七四)、五四～五五頁参照。香川孝雄 (一九八四)、四五～四六頁、また同氏同書一〇九～一五一頁参照。また大田利生 (二〇〇五)、四二～七三と二九六頁参照。

## (一) 『平等覚経』についての先行研究

①藤田宏達氏は、この問題について、次のような指摘をした<sup>6)</sup>。

(ア) 両経の形は言々区々殆ど同じであり、原本の成立は『大阿弥陀経』のほうが古いことは明らかである。もっとも、『大阿弥陀経』では自然に読解される箇所が、『平等覚経』の同じ箇所では、かえって意味が通じなくなっている場合がある、と指摘した。

(イ) 「歎仏偈」と「往観偈」<sup>7)</sup>の例をあげて、『平等覚経』のほうに増広の跡が認められ、しからば、『大阿弥陀経』の原本が『平等覚経』のそれよりも素朴であり、古形を保っていると見てまず間違いないであろう、と指摘した。

(ウ) 両経の本願文を比較してみると、願文の数は「二十四願」である点で同じであるが、内容的には『平等覚経』にいちじるしく整理した跡が認められる。結論としては、〈無量寿経〉の原初形態を想定するという視点からは、「初期無量寿経」の中でも、とくに『大阿弥陀経』に焦点を合わすべきことが知られるであろう。ここで注意すべきことは、現存の『大阿弥陀経』については、確かにもとの原本に基づき翻訳されたものかどうかを確認していないのに、直ちに『大阿弥陀経』の原本が古いと結論付けるのは早計であろう。もし『大阿弥陀経』翻訳に大きな増広・修訂があったら、『大阿弥陀経』の原本を想定できなくなる。

②静谷正雄氏は『大阿弥陀経』と『平等覚経』の相違について、詳しい研究を行った。『平等覚経』の特徴については、藤田氏と違う観点があり、静谷氏の要点を纏めれば、次の通りである<sup>8)</sup>。

(ア) 二訳は言々句々ほとんど同じであり、原本の成立は『大阿弥陀経』を古いと見るべき。翻訳方法から見ても、『大阿弥陀経』は音訳語を用いることがおおいのに対して、『平等覚経』は義訳語を用いることが多い。

(イ) 「歎仏偈」と「往観偈」の例を取り上げながら、『平等覚経』のほうに増広の跡が認められる。『大阿弥陀経』翻訳の際、詩句の部分が省略されたと考えられないことはないが、それよりも原文に詩句がなかったと見るのが自然である。

(ウ) 『平等覚経』の最初の対告衆の部分を取り上げながら、再び『平等覚経』に増

6) 藤田宏達 (一九七〇), 一六七～一七一頁。また同氏 (二〇〇七), 八七～九三頁。

7) 『平等覚経』の二偈について、藤田氏は、坂本(後藤)純子氏の研究を引いて、「『大阿弥陀経』が翻訳に際して詩句の部分を省略したと考えることも可能であるからである。『原始浄土思想の研究』に「原本に詩句がなかったと見るのが自然であろう」と記したことが、再検討の余地がある」と述べた(藤田宏達(二〇〇七), 八七～九三頁参照)。

8) 静谷正雄(一九七四), 五二～五三頁。また、同氏は、「初期無量寿経」について詳しく検討した(同書, 五一～一〇二頁参照)。

広の跡を指摘した。

- (エ) 二経の本願文を比較すると、願文の数は同じであるが、内容的には『平等覚経』にいちじるしく整理した跡が認められる。この点で『平等覚経』は本願思想の展開に重要な役割を果たしたものと考えられるが、このような『平等覚経』本願文の整理は、恐らくその原本にもとづくものであり、それが『大阿弥陀経』の原本よりも整ったものであったことを示している。したがって『大阿弥陀経』原本が、『平等覚経』のそれよりも古形を保っていたものであることは、ほぼ間違いないであろう。

ここで注意すべきところが二つある。まず、『大阿弥陀経』の原文に詩句がなかったという理由が何処にあるか。『大阿弥陀経』は音訳語を用いることが多いと指摘した。したがって、翻訳者の漢文の能力は十分ではなかったといえる。また、詩句は原文にあっても音写語で翻訳するのが不可能である。そして、翻訳者がそれを詩句の形で翻訳するのはかなり高いレベルの漢文教養素質が必要であると言わなければならない。ここで、注意すべきことは、もし『平等覚経』と対照しなければ、静谷氏の考えを疑うことができなくなり、「初期無量寿経」の原始形態が認識できないままとなる。

そして、両経の本願文については、静谷氏は、藤田氏に比べて『平等覚経』の本願文がその原文にもとづくものであるような展開をされる。しかし、それを理由に、直ちに『大阿弥陀経』の原文が、『平等覚経』のそれより古形を保っていたものであると述べているが、論理性がかなり薄いと考える。つまり、『大阿弥陀経』と『平等覚経』の本願文の原始形態がいまだ分かっていない段階で以上の結論は言えないと、筆者は考える。また、願文が原文にもとづくものと指摘したが、更に原文の願数は二十四かどうかは残念なことに、触れていなかったのである。

- ③香川孝雄氏は、『無量寿経の諸本対照研究』に、〈無量寿経〉の諸本の内容を詳しく比較対照表を作り上げて、更に経文全体の比較研究を行った<sup>9)</sup>。「初期無量寿経」の成立次第については、主に次の二つの観点を指摘した<sup>10)</sup>。

- (ア) 『大阿弥陀経』には、「歎仏偈」と「往觀偈」など、『平等覚経』以下の諸本に見られる偈がまったく見られないことである。このことは『大阿弥陀経』の原本にもともと存在しなかったか、翻訳の際に削除されたのか、という二つの可能性を提示し、可能性としては、氏は前者の方が強い、と指摘した。

9) 香川孝雄 (一九八四) 参照。一方、〈無量寿経〉の諸本対照研究については、最近大田利生氏 (二〇〇五) も、「後期無量寿経」の『無量寿経』を基準にして、真宗の立場から新たな対照研究を発表した。

10) 香川孝雄 (一九九三)、二六三～二八一頁。

(イ)「本願数は共に二十四であるが、その順序次第は『大阿弥陀経』と『平等覚経』とは大いに異なり、『無量寿経』以下の諸本はおおむね『平等覚経』の順序次第を踏襲している。これは『大阿弥陀経』の本願が未整理であったのを、『平等覚経』が整理し、順序づけたことを示している」という。

香川氏の論点について、注意すべきは、本願文は『無量寿経』以下の諸本はおおむね『平等覚経』の順序次第を踏襲していることである。もし、筆者の理解に間違いがなければ、香川氏は原文を指す意味ではなく、諸漢訳について指摘したようであると考えられる。そうすると、『平等覚経』の本願文は梵文の本願文とほぼ一致することが説明できないであろう。静谷氏の指摘したように『平等覚経』の本願文は原文にもとづくものであるとするなら、筆者は、『大阿弥陀経』の本願数を一致させるように、『平等覚経』の本願文は本願の一部しか翻訳されていなかったと考える。『平等覚経』原文の本願文は「後期無量寿経」と同じ系統である可能性が非常に高いと考える。

## (二) 平等覚経の特徴

「初期無量寿経」における『平等覚経』の特徴とその意義について、少しふれておきたい。

(ア) 修訂の方針は、『大阿弥陀経』に多くの音写語を使っているので、かなり読みにくい漢文を分かりやすい文章に改めるようなことである。具体的にいえば、両経一字一句の対応の部分は、原本をみず（原本にないところが少なくない、例えば「五悪段」の部分）中国語の文法的な修訂のみ行っただと、言ってよい。

(イ) 翻訳者のすぐれた漢文能力<sup>11)</sup>により、『大阿弥陀経』よりさらに中国文化の影響を受けたことが見られる。例えば、『平等覚経』には、〈無量寿経〉の諸本の中で、「自然」という語がもっとも多く使われ一七七回に達している<sup>12)</sup>。また、『大阿弥陀経』に音訳された菩薩らの名前が、『平等覚経』では意識としている。例

11) 「初期無量寿経」の翻訳者の問題は今後の研究課題である。最近、Paul Harrison氏は『平等覚経』の翻訳者は支謙だと推測したが、特に氏は五悪段について検討していなかった。つまり、この問題ははまだ解決していない課題である。『平等覚経』の翻訳者は支謙である可能性があるが、この問題は完全に解決していない上に、Nattier氏のように支謙の訳風のみに基づく「無量清浄」の原語の推測に対しては反対する。筆者は以前の発表でHarrisonの支謙訳説を引いていたが、これから翻訳者について詳しく検討する必要があると考えている。しかし、筆者の「無量清浄」について結んだ結論は訳者の訳風により判断したのではなく、修正する必要はない。

12) 森三樹三郎氏の研究によれば、〈無量寿経〉諸訳に、『大阿弥陀経』に「自然」という語が一四六回、『無量寿経』は五六回出たという（森三樹三郎、一九五頁）。〈無量寿経〉諸本における「自然」についての研究は、藺田香勲（一九六〇、一八七～二〇九頁）、末木文美士（一九八〇）、福原蓮月（一九八〇）、また森三樹三郎（一九八八）参照。そのほかに、また、中国文化における「自然」についての研究は、笠原伸二（一九五二）の発表がある。

えば、法蔵比丘のことを『大阿弥陀経』では一貫して「曇摩迦」と音写しているのに対して、『平等覚経』では最初は「曇摩迦留」と音写したにもかかわらず、後に「法宝蔵菩薩」と義訳していることである<sup>13)</sup>。しかし、すべての名前を意識したとは限らない。「無量清浄」という仏名はその一例である(拙稿(二〇〇八)と(2009b)参照)。

- (ウ) 当時の中国社会に理解されやすいように、原文になかったものを増広したところもある。例えば、以上の先行研究に指摘されたことであるが、対告衆に「清信士」、「清信女」などを付加したことである(静谷正雄(一九七四), 五三頁参照)。
- (エ) 原文にあったにもかかわらず、自分の意思で撰述、或いは纏めたところもある。もっとも代表的な例は、「無量清浄仏」の名前である。周知のように、『平等覚経』の仏名はほとんど『大阿弥陀経』の「阿弥陀」から「無量清浄」へ変えられた<sup>14)</sup>。このような「小さい」変化は、実は『平等覚経』の大きな特徴であり、また中国初期浄土教の成立と展開にも大きな影響を与えた<sup>15)</sup>。
- (オ) 『平等覚経』においては原本に基づき翻訳した部分は多くないが、それらは「初期無量寿経」の成立の研究に非常に重要な部分である。原本にもとづきもう一度翻訳したもっとも代表的な例は、「歎仏偈」と「往観偈」である。『平等覚経』の本願文が同じく再整理したものではなく、原本に基づき新たに翻訳されたと筆者は考えている。『平等覚経』の本願は配列においても内容においても、「後期無量寿経」(梵本を含む)の本願文とよく一致することから、『平等覚経』の原文は「後期無量寿経」と同じ系統の可能性が高い。しかし、『平等覚経』の翻訳者は、經典の全体にわたって原本に基づき「整理」してなかったため、『平等覚経』の同じ箇所では、かえって意味が通じなくなっている場合がある。

また、『平等覚経』の原本の本願の数は、二十四であった可能性が非常に低いと考えられる。つまり、『平等覚経』の翻訳者は、原本に基づき本願文を翻訳したが、すでに先にあった『大阿弥陀経』の本願数を維持した。その理由は、二つ

13) 香川孝雄(一九八四), 二三頁参照。

14) 『平等覚経』には、全体としては「無量清浄」を主に用いながらも「阿弥陀佛」が九回も現れ、その一回は「無量清浄阿弥陀仏」とも記している。(藤田宏達(一九七〇), 三〇四頁参照)。

15) 「無量清浄」の原語について、二つの説があって、一つは、Nattier氏(二〇〇七)が支謙は *vyūha* と誤解した説で、もう一つは、筆者の中国文化に基づき書き換えられた説である(拙稿(二〇〇七), (二〇〇八)及び(2009b))。Nattier説について対して、*Amitābhavyūha* という原語が存在したかどうかは、一つの大きな疑問だと言わなければいけないであろう。確かに、チベット訳のタイトル (*Ārya amitābhavyūha nāma mahāyāna sūtra*) に、*amitābhavyūha* のサンスクリット語があったが、それはただチベット訳のサンスクリット語の転写で(藤田宏達(一九七〇), 十九~二三頁参照)、もとのサンスクリット原本はそれと同じかどうかは大きな疑問であろう。

あると考えられる。一つは、『大阿弥陀経』の訳者の權威を維持するため、もう一つは、『平等覚経』訳者自身の強い中国伝統文化の背景にある。二十四の数は中国文化の中、非常に特殊な数であることを、否定してはいけない。以上の二つの理由は同時に存在したと考えられる<sup>16)</sup>。

以上の諸点を纏めれば、『大阿弥陀経』が存在していたのに、『平等覚経』を修訂した理由は、『大阿弥陀経』の訳語が難解なので、当時の中国社会で理解されるために、なるべく義訳で『平等覚経』を修訂した。修訂のさい、『大阿弥陀経』において中国伝統文化があらわれている部分（いわゆる撰述されたところ、例えば五悪段）をできる限り維持することが、修訂の方針として見られる。また、本願文と偈文など原文に基づき翻訳したと考えられる。ところが、次節また再次節に述べるように、このように修訂した『平等覚経』は「初期無量寿経」の成立の研究と中国初期浄土教の成立における重要な意義を持っている。

## 二、「初期無量寿経」の成立の研究における『平等覚経』

次に「初期無量寿経」の原型、つまり最古訳と言われている『大阿弥陀経』の原型について、『平等覚経』を通して「初期無量寿経」の成立について検証を加えたい。

『大阿弥陀経』は『平等覚経』より古いので、直ちに『大阿弥陀経』の原本が『平等覚経』のそれよりも素朴であり、古形を保っている<sup>17)</sup>と見ることについては、慎重を要する。また注意すべきことは藤田氏の指摘である<sup>18)</sup>。

「初期無量寿経」の中では、『大阿弥陀経』のほうが古いとしても、注意すべきことは、これは『大阿弥陀経』のみをもって、〈無量寿経〉の原初形態と見るのは危険であって、同じく「初期無量寿経」としての『平等覚経』もあわせて考慮しなければ

16) すでに指摘したように、『大阿弥陀経』の本願数はもともと二十四ではなく、翻訳者は中国の二十四節気の数に合わせるため、一度編集されたものだと考えられる（拙稿（2009a）、二七二～二七三頁参照）。中国伝統文化の中、二十四節気で一年を表すことができ、その数字を暗に「初期無量寿経」に頻繁に使用されている「自然無為」の中国思想に合わせることで、当時の翻訳者の考えではないかと筆者は考える。二十四節気の名前は漢代の名著である『淮南子・天文』、及び『漢書・歴志』に出る（『漢語大詞典』第一巻、一一五頁参照）。『大阿弥陀経』と『老子』・『莊子』・『淮南子』などに現れている道教思想との関連は、すでに多くの先学によって指摘された。例えば、藤田宏達（一九七〇）、香川孝雄（一九九三）、一九四～二〇五頁と三二四～三二九頁参照。

17) 藤田宏達（一九七〇）、一六七～一七一頁参照。また、辛嶋静志氏は、「思想の面でも古い姿を留めている『大阿弥陀経』は、単に『無量寿経』の異訳として片付けられるものではなく、浄土思想の原始的な姿、本来的な様相に近づくための第一の資料なのである」という指摘もあった（辛嶋静志（一九九九）、『大阿弥陀経』訳注（一）、一三六頁参照）。

18) 藤田宏達（一九七〇）、一七一頁参照。

ばならない。

ここで、研究面において『平等覚経』の重要性を示すため、『大阿弥陀経』の成立の問題について少し触れておきたい<sup>19)</sup>。

まず、『大阿弥陀経』の原型についての研究は、色井秀讓氏は、『大阿弥陀経』成立素材として『阿弥陀仏二十四願経』、『極楽莊嚴経』、『阿弥陀仏過度人道経』の三経典の先在を想定した<sup>20)</sup>。

この説が成立するには次の条件を満足しなければいけない。『平等覚経』の原本はただ経典の一部であって、つまり『大阿弥陀経』と違う形の所謂『阿弥陀仏二十四願経』であった。また、『平等覚経』の翻訳者はその違う形の『阿弥陀仏二十四願経』にもとづき本願文を翻訳したことになる。しかし、このようなことは不可能である。まず、『平等覚経』に現れた「歎仏偈」と「往観偈」は、「後期無量寿経」の諸本（特に梵本にもある）にもある。そのことから、偈文の部分は本願文と同じ経典に属することと言っても過言ではない<sup>21)</sup>。そしてもし、『大阿弥陀経』が、以上提示された三経典で組み合わせたものであれば、『平等覚経』の翻訳者がどのようにしてその『大阿弥陀経』と違う本願文を丁度〈無量寿経〉の願文である、と判断したのか。ここで最も注意すべきことは、『平等覚経』の原文の本願文の数は、二十四の可能性が非常に低い、またその内容と順列も『大阿弥陀経』の本願文とかなり違うことである。更に、辛嶋氏の研究によれば<sup>22)</sup>、『大阿弥陀経』に現れる「経道」の用語は、経典の意味ではなく *dharma* (法) という意味である。以上の三点を踏まえれば、『平等覚経』の原本は、「本願文」だけではなく、完全な経典であるしか考えられない。したがって、『大阿弥陀経』の成立について三つの違う経典の先在を想定した説は成立しない。

次に、両経の本願文の違いを通して『大阿弥陀経』の本願文を想定してみる<sup>23)</sup>。「初期無量寿経」願文についての先行研究では、主に次のようにある。

- (ア) 藤田宏達氏は、「二十四願は「初期無量寿経」の所説で、もっとも古い形態を持つとみることに異論を立てる余地はない。しかし、同じく二十四願といっても『大阿弥陀経』と『平等覚経』とでは相当異なっている。『平等覚経』が『大阿弥

19) 本論では、「初期無量寿経」の成立について詳しい検討の余裕がない。本稿では「初期無量寿経」の成立の研究において、『平等覚経』の意義を示したいだけである。

20) 色井秀讓 (一九七五), 六〇〇頁参照。また、『大阿弥陀経』の成立についての研究は、池本重臣 (一九五八), 二四〇頁参照。また、大田利生 (一九九〇), 三七～五三頁参照。

21) 『大阿弥陀経』に偈文がないが、必ずしもその原文にも偈文の部分はないことがいえない(注7参照)。

22) 辛嶋静志 (一九九九), 一三七頁の注(4)参照。

23) 「初期無量寿経」本願文についての詳しい研究は、今後の課題としたい。



陀経』における雑然とした形の願文を修正・整備したことは明瞭であるが、願文が法蔵菩薩の修行によって完成された、いわゆる成就文に当たる部分を見ると『大阿弥陀経』のそれとほとんど変わっていないから、願文と成就文との間には帰って不整合性が目立ってきている。つまり、『大阿弥陀経』のほうが古形を保っており、『平等覚経』は願文についてのみ修正・整備を行った事実を示している。そして、これが「後期無量寿経」の四十八願系に受け継がれたことは、『平等覚経』の第二十三願（飲食自然）を除いた二十三の願文がすべて内容・配列の上で四十八願系に対同している点からみて容易に知られる」と指摘した<sup>24)</sup>。

藤田氏の考えについて、注意すべきことは、まず、現在「初期無量寿経」の原文が二十四願であったと言うのは、甚だ早計だと筆者は考える。そして、すくなくとも『平等覚経』の本願文の原文は、「後期無量寿経」と同じ系統の可能性もある。そのことが注視されていない。筆者の以上の疑問は、正に『平等覚経』にもとづいて提出したもので、そのことから、『平等覚経』は「初期無量寿経」の成立の研究において意義が認められる。

(イ) 一方、静谷正雄氏の考えは次の通り。「両経の本願文を比較すると、願文の数は同じであるが、内容的には『平等覚経』にいちじるしく整理した跡が認められる。『大阿弥陀経』の二十四願は、『平等覚経』では配列の順序と内容をすこぶる異にする二十四願に改められ、しかもそのように改められた願文の順序が、ほとんどそのままの形で「後期無量寿経」の四十八願系の諸本に受け継がれている。この点で『平等覚経』は本願思想の展開に重要な役割を果たしたものと考えられる」と指摘した<sup>25)</sup>。

静谷氏の考慮について注意すべきところは、『平等覚経』の本願文は新たな原本に基づき「整理」したことである。しかし、氏は『平等覚経』の原文にあった本願文が二十四であったことを主張している。しかし、『平等覚経』の原文は「後期無量寿経」と同じ系統である可能性を、氏は考えていなかった。

(ウ) 香川氏は次のように指摘する<sup>26)</sup>。『大阿弥陀経』の本願は未整理のもので、『平等覚経』の本願は整理されたもので、「後期無量寿経」諸本は、『平等覚経』の本願文を受けついでことを示した。

香川氏の論点について、筆者は示したいことは、『大阿弥陀経』の本願はある背景で

24) 藤田宏達（一九七〇）、三八九～三九〇頁参照。また同氏（二〇〇七）、三〇八～三〇九頁参照。

25) 同注(7)、静谷正雄（一九七四）、五二～五三頁。

26) 香川孝雄（一九八四）、四五頁参照。

整理された可能性があるかどうかということである。二つの可能性がある。まず、原文には二十四願ではなく、翻訳者が二十四の数に纏めただけである。次に、それより更に、『大阿弥陀経』の願文は、翻訳者の意思に基づきかなり修正された可能性が存在するかどうか。もしそうであれば、現在の『大阿弥陀経』はその原本と違うこととなる。本願文と成就文とが対応していることだけ見て、直ちにそれが原文にあったものと判断するならば、それは早計ではなからうか。

(エ) 荻谷定彦氏の考えは次の通りである<sup>27)</sup>。「その『諸本対照本』においては、サンスクリット原典を基本として他の諸訳本を対応させている。その結果、『大阿弥陀経』は、特に二十四願の配列順序において、無惨にも経本来の姿を留めないほどバラバラに解体されてしまっている。たしかに、『大阿弥陀経』は、「後期無量寿経」から見れば未熟であり未整理のものであるかもしれないが、しかし、そのことは「後期無量寿経」出現の原因であれ、決して『大阿弥陀経』の欠陥ではなく、またその価値を損なうものでもないであろう。『大阿弥陀経』は「初期無量寿経」の一つとしていまに厳然と存在しているのである。いったい、何であれ未熟なもの、未整理のものがそのままの形で世間に出現するであろうか。それゆえに、〈無量寿経〉の原初形態を考究するにあたっては、この『大阿弥陀経』を措いて他には如何なる経典も存在していないのである」。

荻谷氏の観点によると、「後期無量寿経」から遡って『大阿弥陀経』を見ると、『大阿弥陀経』は経典本来の姿を留めないほどバラバラに解体されてしまった。ではその原因は何であろうか。可能性としては、一つは原文が最も古い形であったという一般的な観点である。その他に『大阿弥陀経』を人為的に修訂された可能性があったかどうかについての研究は、ないようである。故に、これについて、詳しい研究の意義があると、筆者は考えている。『平等覚経』は、正にこの問題を解明するにあたって重要な文献である。

『平等覚経』の願文を通して、『大阿弥陀経』の本願文に関する以上諸点に対して、筆者は次のような諸点を指摘したい。

最も注意すべきところは、『大阿弥陀経』が最古訳であることは事実であるが、直ちに現存の『大阿弥陀経』が、その原本の形態と一致していると言ったら甚だ危険であろう。さらに、現在の『大阿弥陀経』は、原本とかなり違いがあり、特別に「整理・増広<sup>28)</sup>」されたものだと考えられる。纏めれば、次の通りである。

27) 荻谷定彦 (二〇〇三), 二頁参照。

28) 『大阿弥陀経』と『平等覚経』と共通の「五悪段」は、中国で付加された説がほぼ定説となり (藤田宏達 (一九七〇), 一九八～二〇五頁), 筆者はそれに賛成する。「五悪段」は、「初期無量寿経」成立について重要な課題で、改めて別論に詳しく検討したい。ここでは、『大阿』

まず、もともと『大阿弥陀経』の本願文は二十四願ではなく、わざわざ二十四に纏められたものである。つまり、現存の二十四願は、もっとも古い形ではなく、修訂されたものだと考えられる。すでに指摘したように、原本は、二十四願ではなく、ある意図があって、わざわざ二十四願に『大阿弥陀経』で纏められた。『平等覚経』の修訂者が、本願文を重訳したが、願文二十四の数は変えなかった<sup>29)</sup>。池本重臣氏はすでにこの点に注目したようであり<sup>30)</sup>、『大阿弥陀経』の本願数は、実は三十一である。しかしこれについて深く探求していなかったことは残念である。現時点では原文の本願数は推測できないが、少なくとも二十四願ではないことは確かであろう<sup>31)</sup>。二十四願に纏めた理由は、一つしか考えられない。これは、中国伝統文化にある自然観念との関係である。人間と自然との関係は、中国伝統文化において非常に重要な概念で、いわゆる人・天一体感である。十二、二十四、三十六などの数字は、中国文化において非常に重要な数字である。二十四節気で、一年の季節を表すことができ、『大阿弥陀経』によく現われた「自然・無為」の考えに暗に一致する。偶数を好むことは、中国文化の一つの特徴であろう（注（16）参照）。

次に、『平等覚経』の訳者は経典の全体をもう一度翻訳せず、本願文と偈文などを中心に翻訳した。したがって、翻訳者が『大阿弥陀経』の経文の大部分を認めていることが分かる。また訳した本願文は「後期無量寿経」の本願文とほぼ一致していることより、『平等覚経』の原本の本願数は、二十四の可能性がほとんどないと分かる。修訂者が二十四の数を維持する理由は二つであろう。まず、前訳の『大阿弥陀経』翻訳者の権威を維持するためであろう。次に、修訂者自身の強い中国思想背景も無視することはでき

---

『大阿弥陀経』には、「五悪段」のほかにはほかの付加・整理されたところがあるかどうかを問題にしたい。

29) 拙稿（2009b）、六七頁参照。

30) 池本氏は、『大阿弥陀経』が実質的には三一願を含んでいるのに対して、『平等覚経』は二十六の願事を内容としている、と指摘した。（池本重臣（一九五八）、一一七頁参照）。また、本願文の比較研究は、藤田宏達（一九七〇）の研究によれば、『大阿弥陀経』の第二、三、四、九、一三、一七、二四の本願文には、一つの本願に二つか、三つの本願文を含んでいることを示している（三八二～三八四頁）。また同氏（二〇〇七）、三〇五～三〇八頁。

31) 本願文にも付加されたところがあると考えられる。例えば、「智慧勇猛」という「用語」が『大阿弥陀経』に一七回みられる。その中、三輩段のほか、本願文の第七、二二、二三の本願文にも出ている。（拙稿（二〇〇八）、七五一頁）。このようなところが、翻訳者の意思によって、増広されたものだと考えても、少しも不自然ではないであろう。また、『大阿弥陀経』に、「齋戒清浄」の用語が十回あった、特に往生条件として「淫欲を断ずる」と同じ意味を持っている（後の注（36）と拙稿（二〇一〇）参照）。注意すべきは「齋戒清浄」は、中国道教の経典にも、よく使われている。Campany 氏の研究によると、「The general term *zhai* 齋 would have been understood to include not only bathing but also dietary and sexual restrictions—further intensifying social disengagement」と指摘した。（Campany（2009）、一〇六～一〇七頁）。これらの部分は、翻訳者の意思で増広されたものだと考えられる。詳しい研究は、別論に譲る。

ない。例えば、『平等覚経』に「自然」という用語の回数は諸本の中著しく多い<sup>32)</sup>。

次に、『平等覚経』の本願文と「後期無量寿経」の本願文とほぼ一致する理由は、同じ系統の原本を使ったことにある。即ち、『平等覚経』の原本は「後期無量寿経」にほぼ一致することを筆者は指摘したい。そうでなければ、サンسكريット本の本願の配列が『平等覚経』の配列とほぼ一致することが説明できなくなる。この点で、『平等覚経』の本願文は、原文にほぼ一致することがいえる<sup>33)</sup>。

以上の諸点からみれば、『平等覚経』は、最初期の〈無量寿経〉の研究に非常に重要な役割をはたしていることが分かる。

### 三、〈無量寿経〉における国土観の変遷

なぜ極楽を「浄土」と呼ぶのか、またなぜ阿弥陀仏信仰を「浄土教」といわれるかという問題を検討してみたい。本節から発表した論文の結論(拙稿(二〇〇九)と(2009a))にもとづき、更に思想の面から初期中国浄土教成立史における『平等覚経』の意義を検討したい。まず、〈無量寿経〉諸本における国土観の変遷を見よう。

#### ①『大阿弥陀経』における国土観

『大阿弥陀経』は、阿弥陀仏の国土を「須摩題」と訳し、また阿弥陀仏国土とも説いている。その国土観を、「光明無量<sup>34)</sup>」・「智慧勇猛<sup>35)</sup>」・「齋戒清浄<sup>36)</sup>」で纏めるべき

32) 藪田香勲(一九六〇), 一八七～二〇九頁。また注(12)参照。

33) 『大阿弥陀経』の本願のものは何であろうか。ただ本願の数だけを纏めたか、本願の内容がかなり撰述されたか、或いは違う系統の原本であったかについては、詳しい研究を別論で述べたい。少なくとも、現在の『大阿弥陀経』は、全体的に「整理・増広」された經典であるといえよう。

34) 『大阿弥陀経』に極楽の光明無量の特徴はすでに先行研究があった。例えば、辛嶋静志の日本語現代語訳を参照。また、無量光明と智慧勇猛との関連については、拙稿(二〇〇八)参照。

35) 『大阿弥陀経』に極楽に往生する目的は、ただ生死輪廻を超えることではなく、阿弥陀仏と同じ智慧をもつことである。これは原本にもとづくより、むしろ翻訳者自身の意思で付加されたほうが可能性が高い(拙稿(二〇〇八), 七五一頁)。

36) 『大阿弥陀経』には「清浄」という語は十回しか使用されていない。特に往生条件として「淫欲を断ずる」の意味を示している(本文の注(31)参照)。第七願に「断愛慾齋戒清浄。一心念欲生我國」とある。『平等覚経』の対応文(『大正蔵』十二卷, 二八一頁下二)は内容がまったく違う形の第十八願である(大田利生(二〇〇五), 五四頁参照, 異説ある)。また、上輩往生段に:「不當與女人交通。齋戒清浄。心無所貪慕。至誠願欲往生阿彌陀佛國。」(『大正蔵』十二卷, 三一〇頁上二, また、『平等覚経』の対応部分は二九一頁下二〇～二一)。以上の例には次のような共通性がある。『大阿弥陀経』におけるすべての「清浄」の用語は、梵文に相当の用語が見当たらない。『大阿弥陀経』における「清浄」は「齋戒清浄」の意味で、また淫欲を断ずる意味をも持っていることが分かる。「清浄」の語は往生の文脈によく出てくる。そして極楽に往生することとかわりがある。『大阿弥陀経』と『平等覚経』における「清浄」という語のその他の対応箇所は次の五つ。『大正蔵』第十二巻に基づいてそれを示すと、①中輩段には:三一〇頁上二と二九二頁上二〇～二一。②下輩段には:三一〇頁下二四と二九二頁下二一～六。③三一〇頁上二九～中一と二九三頁上二七～二〇。④三一〇頁中三～二と二九三頁

である。「光明無量」は阿弥陀仏の国土の性質で、「智慧勇猛」は阿弥陀仏の極楽へ往生する目的で、「齋戒清浄」は極楽へ往生するための重要な条件である。しかし以上の特徴は原文にあったものか、或いは翻訳者の意思で付加されたものかの問題は、「初期無量寿経」の成立に深いかかわりがあると考えられる。今後の課題にしたい。

## ②『平等覚経』における清浄な国土

『平等覚経』の国土観については、「清浄安楽」・「光明無量」・「智慧勇猛」・「齋戒清浄」で纏めることができる。『平等覚経』では『大阿弥陀経』の「齋戒清浄」の用語を維持しているが、極楽を「安楽」と訳している。「安楽」は中国文化で「清浄」とほぼ同じ意味で、「安楽」と一致させるために、無量清浄仏と無量清浄仏国という語を作った。「清浄」は中国文化において、無為の意味である。無為は道教最高の境界を表しており、仏教の最高の境地、涅槃・仏身を表す<sup>37)</sup>。そして、『平等覚経』における「清浄」は、無量清浄仏国が中心である。もっとも早く阿弥陀仏の極楽を清浄（仏国土）で表したのは『平等覚経』である<sup>38)</sup>。『平等覚経』に「智慧勇猛」という用語が十六回使用されているが、それらはほぼ『大阿弥陀経』を踏襲したものである。しかし、『大阿弥陀経』の本願文にこの用語がよく用いられることに対して、『平等覚経』の本願文には「智慧勇猛」という用語は一切見られない（拙稿（2009b）の八四頁の注（27）参照）。

## ③『無量寿経』における国土観

『無量寿経』の場合は、以前取り上げた「安楽清浄」の用例もあるし、また「齋戒清浄」・「智慧勇猛」の用語もある。それらは、「初期無量寿経」の影響を受けていると考えられる。そのほかは、「清浄莊嚴」、「仏土清浄之行」、「国土清浄」などの用例もある。辛嶋氏の研究によると、その原語は *vyūha* を誤解したことである<sup>39)</sup>。しかしそれが諸仏の浄土で、阿弥陀仏の国土を指す意味ではない。『無量寿経』の国土観はまた「安楽清浄」である（『大正蔵』十二卷、二七四頁中）、その中「安楽」は四回、「安養」は三回用いられる（藤田宏達（一九七〇）、四三六頁）。それに「清浄離欲」、「姿色清浄」な

↘頁上二〇～二九。⑤三一五頁下一六～一八と二九七頁下二一～二三（拙稿（二〇一〇）参照）。  
37) 当時中国の人間観と仏陀観の研究は、塚本善隆（一九七九）、二九～三六頁、また四四頁参照。また、Zürcher（一九七二）、二三二頁参照。また、拙稿（二〇〇八）、七五三頁参照。

38) 拙稿（二〇一〇）参照。また辛嶋氏（二〇〇八）による阿弥陀仏の「浄土」の用語については名詞としての「浄い土」の意味か、動詞としての「土を浄める」（動詞＋名詞）＝浄仏国土（*buddhakṣetram pariśodhayati*）かの先行研究は、ア）藤田宏達氏：「浄土」の原語はない。「浄仏国土」思想の延長上に浄土。法蔵菩薩が土を浄めた結果が、極楽浄土。イ）平川彰氏：（極楽）「浄土」は般若経の「浄仏国土」とは別の起源。ウ）辛嶋氏：この原語は *vyūha* を誤解したこと（辛嶋（二〇〇八）参照）。ここで注意すべきことは、平川氏が『平等覚経』の「無量清浄仏」の名前を注意したが、その原語が不明なので、『平等覚経』と「浄土」との関わりについては結論づけていない（平川（一九八五）、一六～一七頁参照）。

39) 辛嶋静志（二〇〇八）参照。

どの用例もある。

#### 四、『後出阿弥陀仏偈』と『平等覚経』

『後出阿弥陀仏偈』（『大正蔵』十二卷、三六四頁）は、非常に短い偈であるが、初期中国浄土教の成立において非常に重要な資料だと考える。すでに、多くの先学が『後出阿弥陀仏偈』について検討されたが<sup>40)</sup>、さらに『後出阿弥陀仏偈』と『平等覚経』との緊密な関わりと、著者がそれを書いた目的などについて幾つか加えたい。昨年度、筆者は『後出阿弥陀仏偈』に注目し、初期中国浄土経典の成立に『平等覚経』が重要な役割をはたしたことを証明する資料として『後出阿弥陀仏偈』があると考えている。

惟念法比丘	乃從世饒王
發願喻諸佛	誓二十四章
世世見諸佛	姦数無有量
不廢宿命行	功德遂具成
世界名清淨 <sup>41)</sup>	得佛号無量
国界平夷易	豊楽多上人

まず、『後出阿弥陀仏偈』の成立については、指摘したように、此の偈は訳されたものではない。中国で『平等覚経』に基づき書かれたものである。中国で成立したと考えるもっとも固い証拠は「誓二十四章」という文である。既に検討したように、二十四願は『大阿弥陀経』の翻訳者によって編集されたものである。

次に、題名の意味が非常に重要であるが、未だ明らかになっていない。『平等覚経』との関係については、題名に阿弥陀仏と書いているが、「法（宝蔵）比丘<sup>42)</sup>と「清淨」

40) 齊藤隆信氏の研究によると、今までの先行研究は、①椎尾辨匡（一九三三）、三八八頁参照。②境野黄洋（一九三五）、一八五～一八六頁参照。③蓮沢成沢「後出阿弥陀仏偈解題」（一九三二、『国訳一切経』宝積部七）；④望月信亨『佛教大辞典』（一二三頁）、同氏（一九三〇）、『浄土教の起源及發達』の三二〇頁、および（一九四二）『支那浄土教史』一五頁。⑤藤田宏達（一九七〇）、二九六～二九九頁。⑥齊藤隆信（二〇〇六）、一一～二九頁参照。⑦ Jan Nattier (2007)。

41) Nattier氏は、「the term (*wuliangqingjing*) is divided into two parts, i.e., *qingjing* (<*viśūha* <*vyūha*?) referring to the land—that is, to Amitābha's *buddhakṣetra-vyūha*—and *Wuliang* (<*Amidā*'a <*Amitābha*?) referring to the Buddha himself. If there is indeed the derivation of these names, then in light of what we have seen above, this anonymous author got it exactly right.」と指摘した (Nattier 2007, 三八五頁)。「清淨」と「無量」を翻訳されたものとして「清淨」と「無量」の原語を遡って探求しているが、このような研究方法については、藤田氏は、甚だしく危険であろうと指摘していた（一九七〇、二九六頁参照）。筆者はそれを養成する。

42) Nattier氏の英訳は、The monk who only thought about Dharma, In the presence of [lit. “following”] World-Abundance King となる。「法比丘」を「法を念ずる比丘」に誤解したことがわかる。「法比丘」は『平等覚経』に初めて使われた阿弥陀仏の前身としての「法宝蔵比丘」の略語である。

「無量」などの『平等覚経』の無量清浄仏に関する用語があるので、実質的には、『平等覚経』の「無量清浄仏」について書いているものである。この偈のタイトルの意味は、『大阿弥陀経』で訳された語の「阿弥陀仏」の後に、『平等覚経』で書き換えられた「無量清浄仏」を讃嘆したものだと考える。タイトルは「阿弥陀仏」と記しているが、内容はまったく『大阿弥陀経』の「阿弥陀仏」と関係なく、『平等覚経』の「無量清浄仏」のみについて記している。したがって、『平等覚経』に阿弥陀仏も九回見られるが、本偈の目的は阿弥陀仏を讃嘆するものではないとわかる。今まで、タイトルの意味とその目的が分かっていない原因<sup>43)</sup>は、『平等覚経』の「無量清浄仏」の原語と、「清浄」と「安楽」との関係が分かっていないからと考えている。「世界名清浄、得仏号無量」という句の「清浄」は「無量清浄仏国土」の略語である。偈の著者は極楽の正式の訳語としての「安楽」を使わずに、わざわざ「清浄」を使ったのは、『平等覚経』の「無量清浄仏国土」を強調することによって、阿弥陀仏の極楽を清浄な国土として意味付けようとしたと考えられる。「浄土」のもっとも古い形は『平等覚経』の「無量清浄仏国土」である。

なお、齊藤氏が指摘されたほか、この偈は少なくとも宗暁（一一五一～一二一四）の『楽邦文類』（『大正蔵』四七卷、一五一頁上）、袁宏道（一五六八～一六一〇）の『西方合論』（『大正蔵』四七卷、三九五頁下）にも引用されている。したがって、この偈は中国初期浄土教のみならず、後世の中国浄土教にも影響を与えたことが分かる。

更に、注目すべきは、『後出阿弥陀仏偈』に「阿弥陀」「法比丘」「二十四章」「清浄」「無量」などの用語と、偈の『平等覚経』の「無量清浄仏」を讃嘆する主旨である。それを合わせて考えれば、この偈は『大阿弥陀経』と『平等覚経』ともに深く通じる人間しか書けないと判断しなければいけない。『平等覚経』の修訂者と同一人物ではないか、と考えられる。偈は『平等覚経』の研究において重要な文献である。

なお、「国界平夷易」の句の、「夷易」という語は、他の漢訳仏典にもでる。例えば、

↘（境野、藤田、齊藤など参照、また注（40）参照）。

43) 齊藤隆信氏は韻律において本偈の用途が梵唄であると指摘した（二〇〇七）。それに対して筆者は次のことを指摘する。まず、韻律については、当時の社会で教養のある殆どの人が詩のような韻律を書けることがいえるだろう。したがって、ただ韻律によって、それが梵唄に使われるとは言えないと考えている。また、法要に使われている梵唄はほぼ分かりやすいものであるが、本偈のタイトルは、わざわざ暗に阿弥陀仏を通して無量清浄仏を讃嘆するもので、著者本人しか分からないほど分かりにくいものである。したがって、著者がこの偈文を書いた目的は、『平等覚経』の「無量清浄仏」を讃嘆することであるのだとすれば、まず、「無量清浄仏」は翻訳されたものではなく書き換えられたものである。次に、『平等覚経』に現れている阿弥陀仏の極楽の清浄性がすでに当時の社会で重視されていることが分かる。

支謙訳の『佛説維摩詰経』<sup>44)</sup>と竺法護訳の『弘道広顕三昧経』<sup>45)</sup>にもこの語がでる。これについて、改めて検討する意義がある。

## 五、『平等覚経』が後世に与えた影響

「後期無量寿経」の『無量寿経』が「初期無量寿経」の『平等覚経』を参考にして翻訳されたことは疑いが無い。つまり『平等覚経』は「後期無量寿経」の『無量寿経』にも影響を与えた。次の幾つかの方面から証明できる。

- ①『無量寿経』の偈は、『平等覚経』の偈と比較することによって、両経の偈文の漢文においては非常に緊密な関係をもっているようである。
- ②『無量寿経』では極楽を「安楽」と訳した。極楽を表す「安楽」の用語の初出の経典は『平等覚経』であるから、『無量寿経』は『平等覚経』の影響を受けたことが分かる<sup>46)</sup>。
- ③梵文になかった「五悪段」は、『無量寿経』にもある。それが「初期経典」にもとづく修訂したものだと考える。藤田宏達（一九七〇）、二〇五頁の注（5）参照
- ④「智慧勇猛」の用語は、まず『大阿弥陀経』に使用されたが、『平等覚経』には一六回も使用されている。『無量寿経』には二回があり<sup>47)</sup>、それは「初期無量寿経」を参考にしたといえるであろう。

以上の論述を纏めれば、阿弥陀仏の極楽を「浄土」と表記することは『平等覚経』を中心に展開した。纏めれば、

- (ア) 漢訳諸本の中、最古の阿弥陀仏の国土観は『大阿弥陀経』に現れた。それが「光明無量」, 「智慧勇猛」, 「斎戒清浄」で纏めることができる。
- (イ) 『平等覚経』になって、「無量清浄仏」の名前によって、その国土観は初めて「浄らかな土」に変わった。また、『平等覚経』で極楽を初めて「安楽」と訳していることも注意すべきで、中国文化における「安楽」と「清浄」はほぼ同義であり、それが後の曇鸞（四七六～五四二）が極楽を「安楽浄土」と言う元である。
- (ウ) 『後出阿弥陀偈』は『平等覚経』にもとづき書かれたものである。したがって、この偈の目的は、『平等覚経』の「無量清浄仏」のその清浄な国土の讃嘆である。

44) 以無憍慢微妙無像其義夷易（『大正蔵』十四卷、五三六頁上）。

45) 修行者故、是道夷易。衆勤行故、道極平坦（『大正蔵』十五卷、四九一頁下）。

46) 『如来会』は「極楽」を主として用いるが、しかし「安楽」も四回用いている（『大正蔵』十一卷、九七頁上・九八頁中）、藤田宏達（一九七〇）、四三三と四三七頁参照。

47) 拙稿（二〇〇八）、七五四頁参照。



それによって、『平等覚経』は当時の社会に大きな影響を与えたことが証明できる。

- (エ) 『無量寿経』になって、「浄土」という用語となったが、それらは阿弥陀仏の国土を表すものではない。しかし、阿弥陀仏の国土について『平等覚経』の「安楽」の訳語を踏襲している。極楽も「安楽清浄」で纏めるべきである。
- (オ) 阿弥陀仏の国土を正式に「安楽浄土」と言ったのは、曇鸞であった。『無量寿経論』と『無量寿経論註』などに現れる浄土観と『平等覚経』の関わりについては、すでに研究発表した<sup>48)</sup>。ここで加えたいことは、藤堂恭俊氏の「曇鸞の浄土思想は『撰大乘論』に現れる四つの清浄からできた」<sup>49)</sup>という考えに賛成できない。曇鸞の浄土観については、曇鸞は『無量寿経論註』にかなり多くの大乘経論を引いているが、その目的は自身（『無量寿経論註』の作者）がすでに形成した浄土観を大乘経論で証明したわけである。つまり、自身が専念している浄土門を大乘仏教に説かれている「一仏乗」で解釈しなかったのだろう。また、曇鸞の強い中国道教背景も無視することができない。それに、『無量寿経論』と『無量寿経論註』は『無量寿経』の名前をタイトルにしているし、「四十八願」の用語も出ているが、必ずしも『無量寿経』のみを参考にして書かれたものと言えない。例えば、タイトルの『無量寿経』は〈無量寿経〉諸本を指す可能性も否定できないからである。
- (カ) 道綽（五六二～六四五）は『安楽集』に、浄土門は何かについては、はっきり『平等覚経』を引いて説明している（平川彰（一九八五）、二三頁参照）。『安楽集』と『平等覚経』とは緊密に関わっていることが分かる。
- (キ) 羅什訳の『阿弥陀経』には「浄土」の語はないが、玄奘（六〇〇～六六四）訳『称讃浄土仏撰受経』には、「浄土」「清浄」「安楽」「無量清浄喜楽」などの用語があり、特に「安楽」の訳語が『平等覚経』に初めて出たことは確実であるが、したがって、玄奘訳の『称讃浄土仏撰受経』は『平等覚経』の影響を受けたと言える。

## 結論

以上、各側面から「初期無量寿経」における『平等覚経』の意義について、考查した

48) 拙稿（二〇〇九）、七三三～七三四頁、また同（2009a）、二七五～二七七頁参照。

49) 藤堂恭俊（一九八五）、一八二～一八五頁参照。

が、次のように論を結ぶことができる。

第一に、「初期無量寿経」成立史における『平等覚経』については、『大阿弥陀経』は当時存在していたものの、『大阿弥陀経』の訳語が難解なので、当時の中国社会において理解できるよう、なるべく分かりやすい義訳で『平等覚経』を修訂した。修訂のさい、『大阿弥陀経』の中国文化的な部分（撰述したところ、例えば五悪段）をできる限り維持した跡が見られる。また、本願文と偈文など原文に基づき翻訳したと考えられる。

第二に、「初期無量寿経」の成立の研究における『平等覚経』については、非常に重要な意義をもっていることが分かる。現存の『大阿弥陀経』は、「五悪段」を別にしても、特別に「整理・増広」されたもので、『平等覚経』の原本は、「後期無量寿経」の原本と同じ系統に属すると考えられる。もし、『平等覚経』の本願文と対照しなければ、『大阿弥陀経』の本願文は原本と一致していないことは考えることはなかったであろう。『平等覚経』がなければ、「初期無量寿経」の成立の問題は、もとの真実から遠ざかる。そのため、これから「初期無量寿経」成立をめぐる研究するさい、『平等覚経』と合わせて検討しなければいけない。

第三に、初期中国浄土教成立史において、『平等覚経』は重要な役割を果たした。初期中国浄土教は『平等覚経』の「無量清浄」を中心として展開した。具体的に言えば、「無量清浄仏」の仏名で阿弥陀仏の極楽の清浄性を表している。即ち、中国文化においては「安楽」と「清浄」とはほぼ同じ意味で、『平等覚経』においては、極楽を安楽と訳し、その安楽と一致させるため、中国文化にもとづき「無量清浄」を作った。それによって、阿弥陀仏の極楽を初めて清浄な国土（浄土）と呼ぶことになる。『平等覚経』は初期中国浄土教の成立に最も重要な経典だと言っても過言ではない。

第四に、『後出阿弥陀仏偈』は、初期中国浄土教の成立に重要な偈文で、『平等覚経』と緊密な関係がある。『平等覚経』の翻訳者という問題について検討する時に重要な手掛かりとなる。

第五に、『平等覚経』は、直接に「初期無量寿経」と初期中国浄土教の成立に貢献したが、一方、後期經典の『無量寿経』にも影響を与えた。また、『無量寿経』をとおして、間接的に中国浄土教の成立及びその展開に役割を果たした。さらに曇鸞、道綽などの中国の浄土教諸師に影響を与えた。

#### 参考文献

E. Zürcher (1972), *The Buddhist Conquest of China: the spread and adaptation of Buddhism in early medieval China.*

- 笠原仲二（一九五二）、「天と自然—中国古代における自然概念とその内容の展開（その一、その二、その三）」、『立命館文学』。
- 平川 彰（一九八五）、『講座・大乘仏教—浄土思想』、春秋社。
- （一九九〇）、『浄土思想と大乘戒』春秋社。
- 稲城選恵（一九七八）、『浄土三部経訳経史の研究』百華苑刊。
- 藤田宏達（一九七〇）、『原始浄土思想の研究』岩波書店。
- （二〇〇七）、『浄土三部経の研究』岩波書店。
- 福原蓮月（一九八〇）、「平等覚経の自然の思想」、『印度学仏教学研究』二九六～三〇一頁、第五七号。
- 静谷正雄（一九七四）、『初期大乘仏教の成立過程』百華苑刊。
- 池本重臣（一九五八）、『大無量寿経の教理史的研究』、京都：永田文昌堂。
- 荻谷定彦（一九七七）、「初期浄土経典にあらわれた菩薩思想—『阿弥陀経』と『大阿弥陀経』—」、『佛教学』、四五～六七頁。
- （二〇〇三）、『大阿弥陀経』法蔵菩薩説話段の異質性—『阿弥陀経』に比して—、『佛教学』、一～三七頁。
- 森三樹三朗（一九八八）、『老荘と仏教』、法蔵館。
- Nattier, Jan, (2006–2007), The Names of Amitābha / Amitāyus in Early Chinese Buddhist Translations (1, 2), Annual Report of The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University, for the Academic Year 2006, 2007.
- Harrison, Paul (1998), Women in the Pure Land: Some Reflections On The Textual Source. pp. 553–572. *Journal of Indian Philosophy*, vol. 26.
- 大田利生（一九九〇）、『増訂無量寿経の研究—思想とその展開』、永田文昌堂。
- （二〇〇五）、『漢訳五本梵語本蔵訳対照無量寿経』、永田文昌堂。
- Robert Ford Campany (2009), Making Transcendents—Ascetics and Social Memory in Early Medieval China. University of Hawai'i Press.
- 蘭田香勲（一九六〇）、『無量寿経諸異本の研究』、永田文昌堂。
- 齊藤隆信（二〇〇六）、『後出阿弥陀偈』とその用途、『浄土教典籍の研究—佛教学総合研究所別冊』、十一～二九頁。京都：佛教学。
- 境野黄洋（一九三五）、『支那佛教精史』、境野黄洋博士遺稿刊行会。
- 坂本（後藤）純子（一九九四）、「Sukhāvativyūhaの韻律と言語—歎仏偈・重誓偈」（『印度学仏教学研究』第四十二卷第二号、横組一四八～一五三頁。
- 佐々木大悟（二〇〇九）、『大阿弥陀経』の研究。（未出版、課程の学位論文（博士））。
- 色井秀讓（一九七五）、「大阿弥陀経疑点若干」、『印度学佛教学研究』、第二十四の二、五九五～六〇〇頁、日本印度学佛教学会。
- 椎尾辨匡（一九三三）、『佛教経典概説』、甲子社書房。
- 末木文美士（一九八〇）（Ⅰ）、『大阿弥陀経』における自然、『宗教研究』、第五十三巻の四、二五～四八頁。
- （一九八〇）（Ⅱ）、『大阿弥陀経』をめぐる、『印度学佛教学研究』第二十九巻の一、二二五～二六〇頁、日本印度学佛教学会。

- 香川孝雄 (一九八四), 『無量寿経の諸本対照研究』, 永田文昌堂。
- (一九九三), 『浄土教の成立史的研究』, 山喜房仏書林。
- 辛嶋静志 (一九九七), 『大阿弥陀経』願文訳, 『教化研究』第一一七号, 一三五～一四五頁。
- (一九九九―二〇〇七), 『大阿弥陀経』訳注 (一) — (八) 『仏教大学総合研究所紀要』, 佛教大学総合研究所。
- (二〇〇八), 「阿弥陀浄土の原風景: 浄土は Pureland か」(Handout)。(国際シンポジウム「大衆部・大乘・ガンダーラ—仏教美術史・考古学と仏教文献学の出会い—」創価大学)。
- 肖 越 (二〇〇八), 「初期無量寿経における「阿弥陀」と「無量清浄」, 『印度学佛教学研究』七五一～七五四頁, 第五十六の二, 日本印度学佛教学会。
- (2009a), What is the difference between *Sukhāvāṇī* and *Jingtu* 浄土? 『佛教大学総合研究所紀要』, 二六五～二八〇頁, 佛教大学総合研究所。
- (2009b), A Study on the Buddha's Names (*Amituo / Wuliang qingjing*) in the Early Recension of the Larger *Sukhāvāṇīvyūha-sūtra*, 『仏教学会紀要』, 第十五号, 五三～八六頁。
- (二〇〇九), 「浄土」の訳語について: 『無量清浄平等覚経』を中心として, 『印度学佛教学研究』, 七三二～七三五頁, 日本印度学佛教学会。
- (二〇一〇), (Forthcoming) 「無量寿経」における「清浄」と「安楽」, 『印度学佛教学研究』第五十八卷, 日本印度学佛教学会。
- 塚本善隆 (一九七九), 『中国仏教通史 (一)』, 春秋社。
- 藤堂恭俊 (一九八五), 「天親と雲鸞の浄土教思想」, 『講座・大乘仏教 5—浄土思想』, 一七九～二一六頁, 春秋社。

(指導教官の福原隆善先生には、ていねいに本稿の日本語の誤りを修正して頂き、また疑問点を示して頂くなど、ご指導を賜った。また、安達俊英先生にもご教導をたまわった。また角野玄樹先生にも日本語をチェックして頂いた。深く感謝の意を表したい。ただし、本稿に残っているであろうミスは、全て筆者の責任である。)

(しょう えつ 嘱託研究員)

2009年11月25日受理

## 〈Summary〉

A Study on the *Wuliangqingjing Pingdengjue Jing*  
: The Formation of the Early Recension  
of the Larger *Sukhāvativyūha-Sūtra*

XIAO Yue

This study investigates the value of the second-oldest version of the Larger *Sukhāvativyūha-sūtra*, the *Wuliang qingjing pingdeng jue jing* 無量清淨平等覺經 (T12, No. 361). This question is approached in four ways: first, through an investigation of the status of the *Pingdengjue jing* in the early Chinese translations of the Larger *Sukhāvativyūha-sūtra*; secondly, through an investigation of the value of the *Pingdeng jue jing* in terms of the study of the formation of the oldest version of the Larger *Sukhāvativyūha-sūtra*, the *Da amituo jing* 大阿彌陀經; thirdly, through an investigation of the relationship between the Buddha's name in the *Pingdeng jue jing*, *Wuliangqing jing* 無量清淨, and the origin of the term *jingtu* 淨土, referring to *Amituo* Buddha's realm, *Sukhāvati*; and finally, through evidence verifying the influence of the *Pingdeng jue jing* on the Later Recension of the Larger *Sukhāvativyūha-sūtra*, the *Wuliang shou jing* (T12, No. 360) and on the formation of the early Chinese Pure Land Buddhism.

**Key words:** *Wuliangqingjing pingdengjue jing* 無量清淨平等覺經, *Wuliangqingjing* 無量清淨, *Anle* 安樂, *Jingtu* 淨土, *Da amituo jing* 大阿彌陀經

